

「レクリエーション講習会参加者の特性とニーズについて」

～平成 17 年度大阪府レクリエーション協会アンケート調査より～

○横山 誠（財団法人大阪府レクリエーション協会）

相奈良 律（財団法人大阪府レクリエーション協会）

1. 緒言

レクリエーションという言葉は、英語の create（つくる）に「再び」を意味する接頭辞「re-」がついたもので、再びつくる、つまり「つくりなおす」という意味である。原義は、壊れたものがつくり直されること、人間でいえば壊れた状態（病気）が癒えること、疲労から元気を回復することである。（日本レクリエーション協会，2000）

我が国におけるレクリエーションのニーズは、スクエアダンス、フォークダンス、青少年の野外活動、職場レクリエーション、レジャー・レクリエーション等、時代と共に変遷してきた。近年では、多様化する社会のニーズに応じるべく、（財）日本レクリエーション協会は 21 世紀をめざすレクリエーション運動のビジョン「緊急総合 5 年計画」を発表し、①生涯スポーツ②芸術・文化・学習活動③ネイチャーレクリエーション④福祉レクリエーションと 4 つの推進目標を立てた（1997）。各都道府県のレクリエーション協会においても、この推進目標に沿ったさまざまなイベントや事業、指導者養成等を展開している。しかし、それらの事業に対する参加者の特性やニーズの把握、プログラム評価を十分に実施できているとは言い難いのが現状である。

横山ら（2003）によれば、（財）大阪府レクリエーション協会（以下、大阪府レク協会）の講習会参加者と特性として、レクリエーション・インストラクター養成課程認定校学生の参加者が過半数を占めており、学生、一般共に福祉領域からの参加者が多いことを明らかにしている。また、今後期待する講習内容については、福祉レクリエーションに関する内容に大きな期待を寄せられているものの、性別や年代で期待する内容が違うことも明らかにしている。

本研究の目的は、大阪府レク協会のケースを取り上げ、特に大阪府レク協会が主催する指導者養成に関する講習会の参加者の特性とそのニーズを明らかにし、今後のレクリエーション事業の方向性と指導者養成プログラム開発の基礎的資料を得ることである。

2. 研究方法

本研究は、2005年度大阪府レク協会が主催する7つの指導者養成に関する講習会参加者に対して質問紙調査を実施した。質問項目は、性別、年齢、所属、情報源、これまでの参加回数、その日受講した講習会の感想、満足度、今後期待する講習内容等で、調査期間は2005年5月から12月、有効回答標本数は780であった。

3. 結果と考察

調査対象者の属性は、男性 25.1%、女性 74.9%であり女性が圧倒的に多いという結果であった。年代別では10代 19.8%、20代 21.4%、30代 10.8%、40代 16.8%、50代 19.6%、60歳以上 11.7%、所属別では、学生 33.8%、社会人 66.2%であった。所属のうち学生の約60%が福祉領域の学生で、社会人でも65%を超える方が福祉関係者であることが明らかとなり、福祉関係者からのニーズやレクリエーションに関する興味関心が高いことが示唆された。(図1. 2. 3参照)

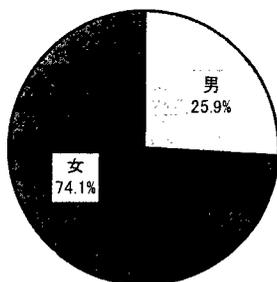


図1. 男女比

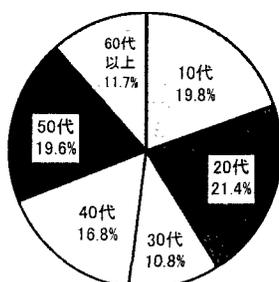


図2. 年代

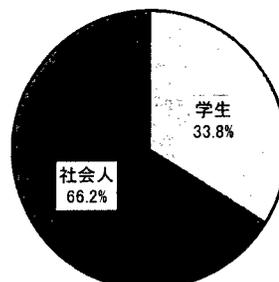


図3. 所属

情報源については、「府レク協会だより (37.6%)」と「学校や職場 (33.4%)」からが大きな割合を占めた。また、これまでの参加回数を見てみると「初めて」の割合が約3割で逆に約7割がリピーターという結果であった。その要因について、学生は資格取得のための現場実習、社会人は自己研鑽、特に福祉関係者は情報やレク財の入手という参加が多いことが考えられる。

感想と満足度については、「とても楽しかった」から「全く楽しなかった」、「大変満足」から「大変不満足」までの5段階評定尺度を用い調査を行った結果、「とても楽しかった」と「楽しかった」、「大変満足」と「満足」という回答は9割を超える結果となった。